説教要旨「されど我が身は可愛くて」

ルカによる福音書２２章５４～６２節

ペトロは、大祭司の家に連行されるイエス様に『遠く離れて』（54 節）従いました。イエス様の弟子であると知られれば、ペトロも捕えられてもおかしくありません。彼が我が身可愛くて、保身を一番に考えていたなら、そんな危険な場所に行くはずがありません。ペトロが危険を冒してイエス様のあとを追ったのは、イエス様を助け出す機会を窺っていたということでしょう。

案の定ペトロは、入り込んだ大祭司の家の中庭で人々に見咎められます。ある女中がペトロに気付いて「この人も一緒にいました」（56 節）と言いました。『イエス様を助け出すためには、今自分が捕まるわけにはいかない』。ペトロは自分にそう言い聞かせながら、結局何も出来ないまま、否定の言葉を繰り返してしまうのです。そして彼が、三度目にイエス様との関係を否定したとたんに鶏が鳴き、イエス様は振り向いてペトロを見つたのです。イエス様と目が合ったペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」（22:34）と言われたこと思い出し、外に出て激しく泣いたのです。

このペトロの離反をイエス様が予告されたとき、同時にこのようにも語っておられました。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（22:31-32）。

ペトロは、三度「知らない」と言ってしまった自分のためになお祈っていて下さるイエス様の慈しみを、そのまなざしに見たのではないでしょうか。

サタンのふるいにかけられて犯してしまったとりかえしのつかない罪を突きつけられ、激しく泣かざるを得ない私たちです。しかしそんな私たちのために、イエス様は祈っていて下さるのです。私たちとイエス様とのつながりは、たとえ私たちの側がそれを否定し、もう自分は関係ないと宣言してしまったとしても、イエス様の方がそのつながりを、決して手離しはしないのです。

（２０２１・２・２８　説教者：稲垣真実）